

- 5) 飯田修一：“新体系物理学の発展と、近藤氏へ、Ⅶ”，物性研究 40(1983) 予定。
- 6) S. Iida: “New Frame in Physics, New Thermodynamic Operations, and Classical Derivation of the Meissner-Ochsenfeld Effect”, to be published (物性研究にも予定)。

物 性 研 は 誰 の た め に

九大・教養 中 山 正 敏

物性研も25才となった。物性研設立の翌年大学を卒業したほぼ“同年輩”の私も、これ迄いろいろな関りを持って来たことを再めて思い出す。物性研の正史、その科学史的位置づけ、外史や私史は、いずれしかるべき人々によって書かれるであろう。ここでは、この機会に考えたことを二、三述べたい。

私が物性研と関りを持った最初の出来事は、共同利用施設専門委員への大学院生任命問題であった。1960年に行なわれた百人委員による選挙に際し、物性若手グループは当時大学院生であった槌田敦氏を推し、同氏は当選した。ところが、物性研究所は同氏を正式の委員に任命できないという。私達は百人委員に訴えて、任命要求の署名を集めた。これが、物性グループにおける私達の活動の始まりであった。この間に、大学院とは何か、共同利用研究所とは何かを考えるようになった。物理学会誌16巻(1961)を開くと、白鳥紀一・近桂一郎、目片守・槌田敦氏等の文章と、それに対する三宅静雄氏の答え、宮原将平氏による物性研の設立経過に関する文章が載っている。この運動の中で、私はある日所長の武藤俊之助氏に面会を求めた。意見のやりとりの中で私は「物性研は全国の物性研究者のものだから、運営にあたっても研究者集団の意見に拠るべきだ。」と言った。武藤所長は即座に、「いや物性研は研究者のものではない。国民のものだ」と言われた。私は、一瞬絶句した。「国民のための科学」ということがその数年前言われていたが、物理学の場合納得の行かぬものを感じていた私だったが、それにしても。…と思っていると、武藤所長は言葉を継いで、「国民の税金によってできた国有財産だ。だから責任を負えない身分の大学院生をその管理に参加させることはできない」と言われた。今では珍しくないこの論理に始めて出会った印象は、強く私に残っている。

十年程話は飛んで、1969年「物性研究」は二大特集を組んだ。「我国における物性物理の研究体制について」(12巻, 1969年4月号)と「そのⅡ, 共同利用研究所の問題を中心に」(13巻, 1969年12月号)がそれである。特に後者には、基研と物性研のあり方について

中山正敏

てのさまざまな意見が載せられている。物性研は当時将来計画を模索中であつたが、その立場からの鈴木平氏の文章、それに対する若手の批判、地方大学の立場からの勝木渥氏の文章などがある。この特集と1971年1月に開かれた臨時共同利用施設専門委議事録（「物性研だより」10巻6号（1971）34）を見ると、当時の議論の状況がよく分る。外側の研究者が共同利用・共同研究を重視するのに対して、物性研側はいくつかのコアグループ——中核的研究設備のまわりに研究者を集めたもの——を中心にした編成替えを志向している。また十年飛んで、将来計画が行政改革の模範ともいえるほど見事に実行された現時点でみると、誰の主張が実現したかは明らかである。外側の研究者の批判は、どの程度取り入れられたのであろうか。

昨年秋、物性研25周年の記念行事として研究所の公開が行なわれた。納税者へのささやかなお返しとなったであろう。私は伝聞情報しか知らないので間違ったらお許しいただきたい。公開は盛況で、理論の展示にも沢山の人が来たそうだ。ただ、人々の関心は超低温や超強磁場よりは、ビールを注ぎ込むとアルコールが精製される装置により多く集った。このことの意味はなんだろうか。今年2月13日の西日本新聞朝刊の第1面に、物性研は低温の世界記録を達成したことが報じられた。しかし、その記事の小見出しは、「絶対零度へあと10万分の3度」であり、記事全体もあとわずかで絶対零度という感じで書かれている。当然のことながら、応用については超伝導のことしか触れられていない。新聞記者の不勉強を責めればすむことだろうか。自然の神秘を探り出しているのだ、という感じを読者に伝えることはそもそもできるのだろうか。これにくらべると、アルコールの精製は分りやすく面白い。役に立つだろう。これも伝聞だが、テフロン的小球を並べたこの装置の考案にあたっては、分子が網目のようにつながっている水を小球にからめとり、その間を自由に動くアルコール分子を落すというアイデアがあつたそうである。物理学的にも未解決の「水とは何か」という問いにつながっているのである。こういう研究が、コアグループとほぼ直交したところから登場して来たことに私は一つの救いを感じる。

物性研の将来計画そのものには批判的な研究者でも、全体としては物性物理学の研究にお金が出たことは良いことだ、超低温にしる超強磁場にしろそれで我国の研究が進むことに期待する、という人も多いであろう。しかし、最近の世の中の動きを見ているとそう簡単には言えない。お金を出すのは、なにがしかの思惑があつてのことである。超低温はその人達にどのように「理解」されているのだろうか。緊縮財政の中でも科学技術予算は軍事費と海外協力につぐ聖域となりつつある。「技術立国」というスローガンの下で、物性研究は核融合や生物技術とは違って確実な歩留りが予想できる分野である。対米軍事技術協力の動きでも、もっとも期待されているのは光・エレクトロニクス技術であろう。NHKの世論調査では、国民の大部分

物性研は誰のために
は軍事技術協力に反対である、と報道された。しかし、物性研究者の建前はとにかく、本心はどうだろうか。レーザー、アモルファス材料、フェライト、MOS、ヘテロ接合の基礎研究協力という形を取った場合、何人が反対できるだろうか。そういうあからさまな形ではなくとも、自分のやっている研究がどういう社会的位置を占めているのか、あらためて確認すべき時期が来ているのではなかろうか。「誰のために研究をしているのか」—— 問いかけられているのは、もちろん物性研だけではない。